


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

戦後民主主義 —現代日本を創った思想と文化—

山本 昭宏 著 ・ 中公新書

ISBN978-4-12-102627-9

920 円 + 税

5月3日は憲法記念日です。前号(4月号)に引き続き民主主義の課題について考える本を取り上げてみたい。

前号(4月号)の「民主主義とは何か」(宇野重規 著)では、2,500年に及ぶ「民主主義」の壮大な歴史、数多くの先人たちの思考の軌跡について述べられている。本書は、「アジア・太平洋戦争」の悲惨な経験の後に誕生した「日本国憲法」を中心に、戦後日本の「民主主義」について考察した著作である。

副題に、「現代日本を創った思想と文化」とあるように、政治の動向のみならず、その時その時の政治家・知識人たちの言説や時代を象徴する映画、演劇、マンガにまで着目して、戦後民主主義の状況を描こうとしている。

巻末に「戦後民主主義 関連年表」が付されていて、大変役に立つ。欲を言えば、思想家・知識人などの人物索引があれば、なお良かったと思う。

と言うのは、同じ学者・評論家でも、時代の推移で、その言説が少しずつ変化しているからである。例えば清水幾太郎(敬称略 以下同じ)は、戦後の民主

化・平和運動に大きな影響力を持ったが、60年安保以後は、次第に保守論壇に登場することが多くなっている。人物索引があれば、どの時代のどういう場面に登場するかが分かるので、その思想の軌跡、変遷も分かるからである。

さて、私は、昭和11年(1936年)生まれである。終戦の年、昭和20年(1945年)には9歳であった。日本国憲法が施行された1947年(以下西暦で記す)には、11歳である。私は、謂わばここに描かれている「戦後民主主義」と共に歩んできたと言える。しかし、この本を通読して、「自分は何とボーッと生きてきたのか!」と慚愧に堪えない。恥ずかしい限りである。

さて、「戦後民主主義」の目次を追ってみよう。

第一章は、「敗戦・占領下の創造 ―戦前への反発と戦争体験」とある。「日本国憲法の誕生 ―『平和と民主主義』の確立」の見出しがみえる。そして、早くも、「朝鮮戦争と再軍備支持 ―第九条との併存へ」の記述がみえる。

第二章は、浸透する「平和と民主主義 ―1952年～60年」である。60年安保に揺れる時代である。「改憲論」と「護憲論」とのせめぎ合いの時代である。

第三章は、「守るべきか壊すべきか ―1960年～73年」とある。この章の中の「2. 二極化する『平和』 ―佐藤政権とベ平連」の中で、著者は次のような総括をする。

佐藤政権は1960年代後半の日本で、「昭和元祿」と呼ばれる繁栄ムードのうえに、「平和国家日本」という言葉を置こうと試み、それに成功したと言える。言い方を換えれば、戦後民主主義的な価値観から、反体制的な要素を「解毒」し、それを保守政権による国民統合のイデオロギーとして機能させることに成功した。

(p.134)

ポーッと生きてきた私には、この総括は、いまひとつしっくりこない。1960年代後半は、私は30歳代である。むしろ同じ時期の花森安治の言動の方が、しっかり覚えている。

日常生活に即した視点から戦後民主主義を批判した人物がいる。

(p.143)

と著者は述べる。

花森は、保守・革新などとレッテルを貼って理解しようとする論壇的な思考様式よりも、「ひとつひとつ自分の目で判断する」ことのほうが民主主義につながる合理的精神だと主張した。

(p.143)

と述べる。

第四章に移ろう。第四章は、「基盤崩壊の予兆 — 1973年～92年」とある。「1. 経済大国化する日本 — 劣勢に立つ直接民主主義」の見出しがみえる。「3. 『一国平和主義』批判 — 冷戦崩壊と"大国"の役割」の見出しもみえる。湾岸戦争に際し、「血は流さずに金だけを出す」という国際世論の前に、「平和主義」が大きく揺れた。PKO協力が1992年6月に成立した。

第五章は、「限界から忘却へ — 1992年～2020年」である。

高坂正堯が、

消極的護憲から積極的改憲へと舵を切る

(p.228)

きっかけは、湾岸戦争である。

大きな見出しだけを拾って「戦後民主主義」を振り返ってみた。

終章「戦後民主主義は潰えたか」の中で、著者は次のようなことを述べる。

(コロナ禍について)自肅要請という出来事は「自由で民主的な主体」とは何かを問いかけていたのだと理解できる。他者への配慮による自肅と同調圧力とが混ざり合いながら、基本的には憲法を大きく損なうことなく、多くの人びとが緊急事態宣言下を過ごした。

(p.283)

〈前略〉 戦後民主主義を、たんに改憲への賛否の問題だけに限定するのは得策ではない。戦後民主主義は、民主主義が「統治」の手段ではなく、「参加」を通じた「自治」の手段であることを教えている。

(p.283)

私は本書で述べられる「戦後民主主義」の同時代をボーッと生きてきて、多くの出来事や言説を覚えているが、改めて、その出来事の背景、その言説の変遷、時代の潮流などを学ぶことができた。

「憲法記念日」に多くの皆さんに薦めたい一書である。

今月の一冊 (令和4年5月号 第179号)